

氏名	熊澤彩子
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第157号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉アレクサンドル・チェレプニンと日本の作曲 －1930年代の洋楽創作における「日本」－

論文等審査委員

(論文審査主査)	東京芸術大学	准教授	(音楽学部)	塚原康子
(論文審査副査)	〃	教授	(〃)	舩山隆
(〃)	〃	〃	(〃)	檜山哲彦
(〃)	東京大学	准教授	(大学院総合文化研究科)	長木誠司
(〃)	東京芸術大学	非常勤講師	(音楽学部)	戸澤義夫

(論文内容の要旨)

本論文は、1930年代の日本における、ロシア人作曲家アレクサンドル・チェレプニンと日本人作曲家たちとの一連の交流、そしてチェレプニンが日本人作曲家を対象に行った諸事業を対象として、その事実関係を明らかにするとともに、1930年代の作曲の周辺に存在した問題に対して、前述のチェレプニンに関する事業や交流が及ぼした影響を考察するものである。

チェレプニンは、1934年に世界ツアーの一環として来日して以降、計5回の来日の間に、さまざまな事業を行った。これらの活動は、日本人作曲家を対象とし、パリで著名な音楽家によって審査されたチェレプニン賞作曲コンクール、日本と中国の作曲家の作品を刊行し、欧米でも販売された、40巻にせまるチェレプニン楽譜出版事業、そして、これらの作品をおもに欧米で紹介するために行われた演奏活動に集約される。

これらの活動に加え、チェレプニンは来日中に日本人作曲家と勢力的に交流を行い、そこで創作に対する考えを明確にしている。それは、自身に内在する国や文化への帰属意識に忠実に作曲を行うべき、というものであった。そして、「ヨーロッパ音楽は行詰まっている。どうしても東洋の力をかりて自らの糧となし再生しなければならぬ」、あるいは「諸君の音楽作品がより国民的であるだけ、その国際的価値は増すであろう」と述べ、前述のような創作態度によって、日本人作曲家が世界で受け入れられる可能性を提示したのである。

ロシア革命で国から逃れ、グルジア、パリと遍歴した体験を持っていたチェレプニンは、パリでは「エコール・ド・パリ」とよばれる外国生まれの作曲家グループとみなされ、彼らが自身のナショナリティに自覚的であると同様チェレプニンもロシア人であることを非常に意識していた。またチェレプニンは、当時亡命ロシア人の間で盛んに論じられた、西洋文化中心主義に対抗したユーラシア主義思想にも傾倒し、ロシアがアジアにルーツの一端を持つことに注目していた。これらの思想的背景を持つチェレプニンが独自に用いていた9音階、インターポイントなどの創作技法は、チェレプニン自身は最終的に民謡への志向性をもつものとして理解していたのである。

そしてこのような創作理念を持つチェレプニンとの交流は、日本人作曲家の創作志向にも影響を及ぼすものであった。チェレプニン楽譜にみられる日本人作曲家の作品は、「祭り」や「民謡」、あるいは「日本」を題材とするものが多く、チェレプニンの思想とパラレルな関係を類推させる。また本論ではとくに、近衛秀麿、清瀬保二、松平頼則、江文也、伊福部昭をとりあげ、彼らの思想や作品の特徴とチェレ

プニンの影響について考察したが、そこには、戦後批判されたような「チェレプニン楽派」と呼びうるような統一的特徴は見出せないものの、それぞれに「日本」あるいは作曲家自身の出自や故郷の表現を志向する作品傾向がみられる。

また、チェレプニンが諸事業を通じて、日本人作曲家の作品を欧米に紹介したことは、日本人作曲家の活動の方向にも影響を及ぼした。チェレプニンと日本人作曲家が交流を持つ際に中心的な役割を担った新興作曲家連盟は、国際現代音楽協会（ISCM）の日本支部となり、チェレプニンが日本を離れた後も、積極的に日本人作曲家の作品を欧米に紹介する機会を設けたのである。

それ以前の日本の作曲界では、いわゆる「ドイツ・アカデミズム」と呼ばれるような、ドイツを中心としたルーツを持つ古典的な作曲技法の習得状態によって評価される傾向にあり、その主流の傾向に懐疑的であったり、フランス音楽に傾倒していたり、当初から「日本」を強く意識していたりという状況にあった若い作曲家たちは、自らを「在野」と認識していた。しかし、主にその「在野」の作曲家に関わったチェレプニンの活動は、その支援の規模によって、彼らの活動を、日本の作曲全体が注目する段階にまで押し上げたのである。

そのことは、日本人作曲家が、欧米で認められるきっかけを作ったと同時に、彼らの作品や作曲傾向が1936年ごろから当時盛んに議論された「日本的作曲」論によって、非難の対象となることもあった。ここには、西洋の技法に権威を求める方向と、西洋の評価に権威を求める方向との対立項が見え、そこには対立する両者に別々の形で西洋の権威が顔をのぞかせるという、極めてねじれた意識が存在するのである。

このように、チェレプニンの来日と、日本人作曲家との交流は、直接交流をもった作曲家のみならず、1930年代の日本の作曲全体にとって、極めて大きな影響を及ぼした出来事であった。

#### （総合審査結果の要旨）

本論文は、ロシア人作曲家アレクサンドル・チェレプニン（1899－1977）と日本人作曲家との交流および彼が行った作曲賞コンクール・楽譜出版という事業の実態を解明し、それらが1930年代の日本の作曲に及ぼした影響を作品と文化環境の両面から分析考察したものである。

本論文は全5章からなる。第1章ではチェレプニンの生涯をたどり、彼のユーラシア主義思想や9音音階・インターポイントなどの創作技法を概観した。第2章では1934年～37年の5度にわたる滞日時におけるチェレプニンの行動と日本人作曲家との交流を追った。第3章では、日本人作曲家を対象にしたチェレプニン作曲賞コンクールと、40巻に迫るチェレプニン楽譜出版事業の詳細を明らかにした。第4章ではチェレプニンと交流のあった近衛秀麿・清瀬保二・松平頼則・江文也・伊福部昭をとりあげ、その言説や作品の特徴からチェレプニンの影響をさぐった。第5章では1930年代の日本の作曲界の動向と「日本的作曲」等の論を整理し、楽譜出版や演奏を通して日本人作曲家を欧米に紹介したチェレプニンの活動が「在野」の作曲家の力を押し上げる働きをしたことを論じた。

チェレプニンは、これまで日本の洋楽創作史においてしばしば言及されながらも実体がつかみにくく、戦後は事実関係の誤認にもとづく批判も流布した。本研究は、日本語で書かれたチェレプニンに関する初の学術論文として、チェレプニンの全体像を国内外の最新の研究成果によって示した上で、日本にかかわるチェレプニンの事跡を広範囲に渉猟した一次資料とインタビューから洗い直し、「チェレプニン楽派」やチェレプニン楽譜の実像を明確に正した。また、近衛秀麿《越天楽》の演奏記録、伊福部昭に対するチェレプニンのレッスン・ノートなどの貴重な資料を発掘し、チェレプニンが同時代の日本の作曲家に与えた影響をかれらの言説と作品に基づいて丹念に解きほぐした。これらは、今後の研究の基礎となる重要な知見であり、博士の学位にふさわしい意義をもつ成果であると評価された。

一方、個々の論点や分析、多様に広がりうる可能性をもつ諸々の着眼点が必ずしも十分な密度で掘り

下げられていない点、また各章はバランスよく構成されているものの記述がやや拡散した嫌いがある点は惜しまれるところである。しかし、チェレプニンを通して国際化の入り口にあった日本の作曲の諸問題に迫ろうとするテーマ設定のもつ有効性と将来の研究への発展性は高く、合格と判断した。